

森のちやれんがニュース

2019 秋

Newsletter vol.17



第5回特別展

『アイヌ語地名と北海道』を開催（2019年7月6日～9月23日）

北海道の地名は、その多くがアイヌ語に由来します。このことは、アイヌ民族が北海道に先住してきたことの何よりの証です。

この特別展は、道内初公開の国宝伊能図をはじめ江戸時代の古地図・古文獻に記された地名や、アイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三の調査記録、近現代における地名のあゆみなどをもとに、〈地名〉を通して北海道を見つめ直す展示会となりました。また、子どもたちにも地名の魅力を楽しんでもらう体験コーナーでは、家族で楽しむ様子も見受けられました。

そのほか、総合展示室のクローズアップ展示や、記念ホールでの国立アイヌ民族博物館のPR展示、そして開拓の村での建物に関する地名の紹介展示など、様々な場所で関連展示を行いました。（研究職員 鈴木明世）



単眼鏡を設置して、資料に記述された細かい文字までじっくり見ていただけるようにしました。



CONTENTS

- ② 収蔵資料紹介
アイヌ民族の「耳飾り（ニンカリ）」について
- ③ 展示イベント予告
百聞は一見にしかず！
企画テーマ展「エゾシカ」を開催します
- ④ 研究活動紹介
高齢者と博物館の協働で
地域学習コンテンツを開発します
- ⑥ はっけん広場 夏の活動報告
初夏のイベント、大作戦の結果は？
アイヌ民族文化研究センターだより
2019年度の「アイヌ文化巡回展」を
白老町と新ひだか町で開催しました
- ⑦ トピックス
博物館にカパ・ハカが響いた春
「Tuku lho 受け継がれるレガシー」が開催されました
- ⑧ 活動ダイアリー
2019年6月～8月の記録

収蔵資料紹介

アイヌ民族の「耳飾り(ニンカリ)」について

亀 丸 由紀子

アイヌ民族文化研究センター 学芸員

今回紹介する収蔵資料は、アイヌ民族の「耳飾り」です。現在、北海道博物館では、約60点の「耳飾り」が収蔵資料として登録されています。これらの資料は、当館が1971年に旧北海道開拓記念館として開館してから今日までに収集されたものです。

アイヌ民族の装身具の一つである「耳飾り」は、アイヌ語でニンカリと呼ばれます。通常は、二つで一組になっていて、ピアスのように、耳たぶにあけた穴に通して身につけるものです。

アイヌ民族の装身具には、「耳飾り」の他にも、首飾りや玉飾り、冠や刀などがあります。クマ送りなどの儀式の際に男性が身につける冠や刀、同じく、儀式などの際に女性が身につける首飾りや玉飾りとは違って、「耳飾り」は男女ともに子どもの頃から身につける装身具です。明治時代に入り、開拓使によって男性の「耳飾り」の着用が禁止されるまでは、儀式の際などの特別な時だけではなく、日々の暮らしの中で男女や年齢に関係なく、身につけられていました。

聞き取り調査の記録や文献をあたってみると、「耳飾り」をつけるために

は、7～8歳までの間に耳たぶに穴をあけて、穴が完成するまで糸や紐、布を通しておいた、という記録が残されています。また、穴をあける時には、皮針や布団針のような、太めの針を使った、という記録もあります(『アイヌ民俗文化財調査報告書』北海道教育委員会, 1983, 1985, 1987, 1988, 『アイヌの民具』萱野茂, 1978)。

布を裂いたものや紐、または、ブドウづるを磨いたものなどを「耳飾り」としていた記録もありますが、現在、アイヌ民族の「耳飾り」として博物館等施設に収蔵されているものの多くは金属製で、当館所蔵である約60点の「耳飾り」も全て金属製です。

また、金属製の「耳飾り」とひとくくりに言っても、金、銀、銅や、錫、鉛、鉄など、様々な材質が使用されています。筆者が2016年に行った金属製「耳飾り」の材質分析調査の結果では、現在、博物館などに残されている「耳飾り」の多くは、銅・亜鉛・ニッケルの合金である洋銀、という材質を用いたものであることが、分かりました。その後の調査でも数多くの「耳飾り」を見せてもらいましたが、やはり、洋銀

を使った「耳飾り」が多いようです。

形は、平面状に見て、写真1にあるように円形を示す型式(I型)と、「?」形を示す型式(II型)の、大きく分けて2つの型式に分類され、当館の「耳飾り」はII型がやや多い傾向にあります。また、「耳飾り」の多くには、写真2～4のような金属製の飾り玉や、写真5～6のようなガラス玉を用いた飾りがついています。大きさは、輪の直径が7～8cm、重さは10～15gくらいのものが一般的ですが、当館収蔵資料には、写真1の収蔵番号: 165936, 32820のように直径が10cmを超える大ぶりのものが数点存在するのが特徴です。

交易によってアイヌ文化にもたらされたとされている「耳飾り」。その形や素材、作り方をじっくり分析し検討していくことで、交易ルートの解明や新たな側面からのアイヌ文化を知る重要な手がかりとなるだろうと考えています。



写真1 (収蔵番号: 左から165936, 32820, 上165942, 下165938)
右下の165938を一般的な「耳飾り」とすると、左2つの大きさがわかる。



写真2 (収蔵番号: 32820)



写真3 (収蔵番号: 165939)



写真4 (収蔵番号: 32977)



写真5 (収蔵番号: 165942)



写真6 (収蔵番号: 165936)

展示イベント予告

百聞は一見にしかず！ 企画テーマ展「エゾシカ」を開催します

水島 未記

研究部自然研究グループ 学芸主幹

いま、北海道の生き物で大きな問題となっているエゾシカについて、生物としての姿から、過去の人との関わり、近年の個体数増加とそれによる影響、その対策まで、多様な視点から広く紹介する企画展を開催します。

展示は3部構成です。

第1章「しかと見よ！ これぞエゾシカ」

第2章「あしかけ何年？ 人とシカ」

第3章「やるしかない！ シカ対策」

第1章では、「生き物としてのエゾシカ」にスポットを当てます。

いまやエゾシカは北海道でもっとも身近な野生動物のひとつになりましたが、ふだん何を食べて、どのように暮らしているのかなど、知っているようで意外と知らないことが多いのではないのでしょうか。エゾシカやそれに近い動物たちの剥製や骨格標本などを多数展示し、動物の中でのエゾシカの位置づけや、その生態を紹介します。

第2章では、開拓使によるエゾシカ利用、アイヌ民族とエゾシカとの関係などなど、人とエゾシカの関わり史を紹介します。

エゾシカも、かつては非常に数を減らし、絶滅が心配される状態が長く続いていたことはご存じでしょうか。さらに時代をさかのぼれば、明治のはじめには膨大な数が捕獲され、開拓使は

鹿肉缶詰工場まで建てたという歴史があります。開拓使のエゾシカ政策に関わる文書（重要文化財）や、出土した缶の実物なども展示します。

第3章では、現在の「エゾシカ問題」の経緯と現状、被害を減らすための対策などについて紹介します。

北海道東部を中心にエゾシカが増えはじめたのは30年ほど前。爆発的に数を増やし、農林業被害や交通事故の増加など道民生活への影響、野草や樹皮を食べることによる生態系への影響などが大きな社会問題ともなりました。その後、道東だけでなく、道央部など、より西の方へとその影響はひろがっていきます。

北海道では「北海道エゾシカ管理計画」を定め、人間活動とエゾシカとの「あつれき」を減らし、エゾシカと人の共生および生物多様性の保全と持続可能な利用を図っています。また、多くの民間団体も、被害を減らしたり、有効利用を進めたりするための努力をつづけています。そういったさまざまな活動を、豊富な資料でわかりやすくお伝えします。「エゾシカになってみる」体験ができる展示物も準備中です。

道東でのエゾシカの増加は落ち着いてきたように見えますが、まだ油断できません。札幌近郊ではむしろここ1

～2年で急激に増え、当館のある野幌森林公園にも定着し、森林への影響も出てきています。

エゾシカ肉は道民にとって身近な存在となり、食材としての普及は着実に進んできました。その一方、例えば札幌の市街地でのシカの出没はもはやニュースにもならなくなり、道民のみなさんの関心も薄れてきているように思えます。エゾシカを取り巻く現状も「聞いたことはあるけどよくわからない」という方も多いかもしれません。企画展をつうじて、エゾシカそのものやエゾシカ問題についてあらためて広く伝えたいと思います。

「エゾシカ協会」と共同主催のシンポジウムのほか、子どもたちにもエゾシカを身近に感じてもらえるような体験型イベント「エゾシカまつり」など、さまざまなイベントも開催します。この企画展が、北海道のエゾシカと人の共生、さらに北海道の野生動物と人との関係、その将来について考える機会となれば幸いです。

キャッチコピーは「百聞は一見にしかず」。ぜひ、その目でごらんください。

第15回企画テーマ展「エゾシカ」
会期：2019年10月12日（土）～12月15日（日）
会期中の休館日：月曜日（10月14日、11月4日は開館）、10月15日（火）、11月5日（火）



エゾシカなどのさまざまな標本も展示



鹿肉缶詰 これはレプリカですが実物も登場



道民生活への影響も紹介

研究活動紹介

高齢者と博物館の協働で地域学習コンテンツを開発します

青柳 かつら

研究部生活文化研究グループ 学芸主査



学芸主査 青柳かつら

1974年、稚内市生まれ。北海道立林業試験場研究職員を経て2009年より当館学芸員。2011年に筑波大学で博士（環境学）取得。写真は、帯を馬道、文房具を檣と丸太に見立てた、集材作業の聞き取り調査の様子。

超高齢社会で博物館が果たす役割

近年、人口減少や超高齢社会対策は全国の自治体に共通する課題となっています。北海道では、今後大幅な人口減と高齢化の進行が予想されており、自治体の存続や、産業・くらしの活力低下が心配されています。

解決策の1つとして、高齢化をネガティブに捉えるばかりではなく、高齢者が持つ地域独自の知識を積極的に活用して地域の個性や誇りを産み出す地域学習を各地へ広げ、地域資源管理の担い手を育成するシステムをつくることが重要です。さらには、地域博物館がそうした拠点として、知識の集積や人材の交流の場となれば、超高齢社会

における、博物館の新たな役割発揮につながります。

こうした問題意識から、筆者は映像アーカイブ、高齢者福祉の研究者とともに、2018年度から、1) 博物館の連携、2) 映像をツールとする世代交流、3) 高齢者のウェルビーイング（幸福感）をキーワードに、地域学習コンテンツの開発に取り組んでいます。

モデル地での実践活動

この研究では、道北地域に2つのモデル地を設定しています。まず、士別市朝日町は、天塩岳山麓に位置し、良質な木材を生産する、林業のまちとして発展しました。筆者は、同地で2009

年から林業労働にかんする聞き取り調査を始めて以来、朝日町郷土資料室、同室ボランティア「知恵の蔵運営委員会」、そして地元朝日中学校、公民館等と連携して、同室の所蔵資料を活用した回想法サロン、朝日町の地域資源マップづくり、同町の魅力を再発見する地域資源探索ツアー、中学校総合学習と公民館講座を兼ねた地域学習などに取り組んできました。

2018年度、筆者らは、馬を使った木材運搬に関する思い出を語るサロンを開催したり、昭和期の暖房用具、照明器具といった同室所蔵資料の使用方法的動画記録（写真1）を行いました。

そして、名寄市智恵文は天塩川の中流部にあり、緬羊飼育や馬産、ジャガイモなど寒さに強い作物栽培が盛んな農村地域として発展しました。筆者らは、2018年夏から、智恵文中央老人クラブと連携して、かつて同地の主要産業であった緬羊飼育、馬産をテーマに、地域学習会を開始しました。その秋には地道な広報が学校教員の目にとまり、智恵文小学校の児童も参加して、賑やかな学習交流が始まりました。

2019年度は、馬を使った米づくりの再現映像（名寄市北国博物館所蔵）を素材に、昔と今の米づくりを比較し、高齢者の記憶を伝える学習交流会（写真2）、智恵文の開拓期の食文化をテーマとする体験学習も実施しました。

同年度春以降は、同校や地元公民館との連携も深まり、地域のニーズを企画に反映させる仕組みもできつつあります。モデル地でのサロンや学習会の成果は、リライトを作成し、地域文化のアーカイブ資料として、研究協力者をはじめとする地元還元しています。

活動評価：高齢者の幸福感

実践活動の目的は、高齢者の皆様においては、1) 楽しみながら地域の歴史・



写真1 暖房用具の使用方法的動画記録 茶話会の形式で、参加者は楽しみながら、昔の記憶を語り合ったり、道具の使い方を実演します。若い世代への文化伝承の場でもあります。



写真2 「昔と今の米づくり」を学ぶ学習交流会 智恵文中央老人クラブの皆様、農業機械や融雪剤等がなく、馬と人が一体になって働いた頃の米づくりの経験を語って頂きました。

文化の記録・伝承に参画すること、2) 脳と心の健康づくりをして、くらしの幸福感に役立てること、小・中学生においては、地域学習での関心・知識・態度・技能・参加の能力向上です。

アンケートによる活動評価では、朝日町の高齢者(N=10)は、「次年度以降も子供達への教育活動を続けたい(90%)」のほか、活動を通じて「気づいていなかった地域の魅力を学べた」「朝日の自然や歴史を自分で調べるようになり、くわしい知識が得られた(各80%)」を肯定する回答が多数でした。活動の継続や次世代への教育活動の提供が、高齢者の自主学習につながり、達成感を与えていると思われます。

一方、活動を開始したばかりの智恵文の高齢者(N=10)は、学習会で「楽しい時間を過ごせた」「思い出話でおしゃべりができた」「また、こうした会に参加したい」等が特に多く、全員が肯定していました。今後は内容面での充実や参加層の多様化などにより、活動への満足感を高めていくこと、リピーターを増やしていくことが重要です。

そして参加する高齢者の皆様の主観的幸福感、主観的健康観は、道北地域の既存調査結果と同程度か、より高い傾向も見られました。これらについては引き続き調査を続けていきます。

ウェブでの情報発信

2019年度は、世代交流の促進や成果の普及を目的に、こうした研究の成果や活動日誌を発信するホームページ(HP)とフェイスブックページを開設し

ました。「映像アーカイブ」が研究の1つの軸であることから、HPでは、現在、昭和20～30年代の林業技術を再現した「タマ樫への木材積載」と「鋸の目立て」、「朝日町郷土資料室紹介」など計5本の動画を視聴できます。

これらのページでは、モデル地での地域学習の実践について、老若世代を含む多様な層の関心を底上げすると共に、道内をはじめとする農山村地域の自治体で「自分たちの地域でも取り組みたい」という動きが増えることを目指しています。是非、これらのページをご覧ください。

○「博物館を拠点とする地域資源活用研究会(みゆげけん)」HP

<https://wellbeingas.wixsite.com/mysite>

○同フェイスブックページ

「博物館を拠点とする地域資源活用研究会」で検索。上記HPにリンクもあります。

博物館を拠点とする地域資源活用研究会(みゆげけん)

少子高齢社会のウェルビーイング創成型地域学習コンテンツの開発



近年、人口減少や超高齢社会対策は全国の自治体に共通する課題となっています。北海道でも、今後大幅な人口減と高齢化の進行が予想されており、自治体の存続や、産業・くらしの活力低下が心配されています。

解決策の1つとして、高齢者が持つ地域独自の知識を積極的に活用して地域の個性や誇りを産み出す地域学習を各地へ拡げ、地域資源管理の担い手を育成するシステムが必要です。

本プロジェクトでは、1) 博物館の連携、2) 映像をツールとする世代交流、3) 高齢者のウェルビーイング(幸福感)



写真3 「博物館を拠点とする地域資源活用研究会」HP(抜粋) トップの画像は木の円盤を丸太に見立てて、樫に木材を積載する技術を再現しています。動画でもご覧頂けます。

はっけん広場 夏の活動報告

初夏のイベント、大作戦の結果は？

初夏から夏休みにかけての6、7月に、はっけんイベント「くるくるピクチャー大作戦！」を開催しました。両面にイラストを貼った台紙をくるくる回すと、あら不思議、両面の絵が合体して見えてくる！という、目の錯覚を利用した工作です。博物館の展示物をモデルに、アンモナイトやナウマンゾウ、ヒグマなどを登場させました。

用意したイラストに好きな色を塗っ

てもらおうと、ひたすらリアルさを追求する小学生の傍らでお母さんの夢がさく裂！くるくる回した先に見えるのは虹色の殻に入る水玉模様のアンモナイト…と、5cm四方の世界にそれぞれの個性が発揮されていました。

用意した9種のイラストのメインは展示室3テーマに、一見地味に立っている「糞突き棒（冬期に便所で凍結した糞尿を崩すための棒）」でした。

展示場ではなんとなく通り過ぎてしまった、という家族も、説明すると興味を持って作ってくれて、完成した台紙をくるくる回しながら「おおっ！突いてる、見てみる！」と一番歓声を上げていたのはお父さんが多かったようです。後でもう一度本物を見に行こう、という嬉しい声も聞かれました。お客様も多くなる季節に大人も子どもも気軽に作って楽しめるイベントになったようです。

（解説員 越田雅子）



イラストに色を塗っています



糞突き棒（合体図）



くるくるすると何が見えるかな？

アイヌ民族文化研究センターだより

2019年度の「アイヌ文化巡回展」を白老町と新ひだか町で開催しました

当館が毎年道内各地で開催しているアイヌ文化巡回展。

今年度も、アイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三（1899～1992）による各地の地名調査資料の紹介を中心とする内容で、白老町にある白老町中央公民館・白老コミュニティセンターと、新ひだか町静内にある新ひだか町公民館・コミュニティセンターで開催しました。

■ 第6回アイヌ文化巡回展

アイヌ語地名を歩く～山田秀三の地名研究資料から～白老

期間：9月17日（火）～26日（木）

会場：白老町中央公民館・白老コミュニティセンター

（白老町本町1丁目）

■ 第7回アイヌ文化巡回展

アイヌ語地名を歩く～山田秀三の地名研究資料から～静内を中心に

期間：9月22日（日）～23日（月・祝）

会場：新ひだか町公民館・コミュニティセンター

（新ひだか町静内古川町1丁目）

（アイヌ民族文化研究センター長 小川正人）



写真左から 山田秀三氏（1971年）、山田氏による白老・ポロト湖のスケッチ（1954年）、山田氏による「静内川下流図」（1979年）

トピックス

博物館にカパ・ハカが響いた春

ニュージーランドマオリ芸術工芸学校／テプイア主催「Tuku Iho 受け継がれるレガシー」が開催されました

「Tuku Iho 受け継がれるレガシー」は、ニュージーランドマオリ芸術工芸学校が2013年から世界各地で実施しているマオリ文化を紹介する世界巡回展示です。これまでに中国（上海）、ブラジル（リオデジャネイロ）、アメリカ合衆国（ワシントンDC、ロスアンゼルス）などで開催されてきました。

2019年は、ラグビーワールドカップを控えた日本で開催されることとなり、その開催地の一つとして北海道が選ばれ、4月27日（土）から5月14日（火）まで、当館の特別展示室と記念ホールにて開催されました。

特別展示室（当館の第14回企画テーマ展「北の手仕事 2019」と同時開催）では、マオリ芸術工芸学校による工芸品が展示され、期間中には館内で工芸家James Rickardさんによる木彫とWi-Kuki Hewettらによる石工の実演も行われました。

記念ホールでは、5月12日（日）までの間、ニュージーランドの全国高等学校カパ・ハカ大会の優勝チーム Raukura の高校生と先生たちによるパフォーマンスアートが連日行われました。

美しく、そして迫力のある踊りと歌声。マオリ語の歌が、記念ホールの空間を超えて館内に響いた日々でした。

当館での Tuku Iho の開催にあたっては、主催者であるニュージーランドマオリ芸術工芸学校とテプイアや後援のニュージーランド大使館等をはじめ、北海道歴史文化財団等の関係機関には、それぞれ多大なご協力をいただきました。末尾になりましたが、ここに改めて感謝申し上げます。

（アイヌ民族文化研究センター長
小川正人）



カパ・ハカ公演



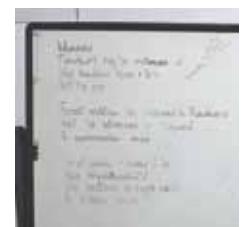
カパ・ハカ公演



展示室のようす



展示準備風景



披露された歌の歌詞が書かれたホワイトボード



展示パネル



展示作品



木彫の下絵を描くJamesさんと彼の作品

活動ダイアリー

2019年6月～8月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

6月1日(土)

■はっけんイベント「くるくるピクチャー大作戦！」が開催。(～6～7月の土日祝、7月25日～31日の開館日毎日)



6月2日(日)

■ミュージアムカレッジ「100年前の北海道と朝鮮半島」を開催。担当：山田伸一。

6月8日(土)

■総合展示室クローズアップ展示①・②を展示入替。

①古地図・絵図からさぐるアイヌ語地名～10月11日(金)まで開催。



②松浦武四郎の地図からさぐるアイヌ語地名～10月11日(金)まで開催。



6月9日(日)

■古文書講座「はじめての古文書講座(全3回)【入門編】」第3回を開催。担当：東俊佑。

6月15日(土)

■ちゃれんがワークショップ「縄文土器をつくる(全2回)第1回 つくる」を開催。担当：右代啓視・鈴木琢也。

6月16日(日)

■特別イベント「海野和男の生きものの写真のスズメ」を開催。担当：海野和男氏。

6月21日(金)

■野幌森林公園ヒグマ対策連携会議を開催。担当：総括グループ。

6月23日(日)

■ミュージアムカレッジ「アイヌ語由来の標語・愛称を再考する」を開催。担当：奥田純己。

6月26日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：圓谷昂史・亀丸由紀子。

6月29日(土)

■ちゃれんがワークショップ「のこぎりでネームプレートをつくろう」を開催。担当：青柳かつら・山際秀紀・池田貴夫・鈴木明世。

6月30日(日)

■ちゃれんがワークショップ「縄文土器をつくる(全2回)第2回 焼く」を開催。担当：右代啓視・鈴木琢也。於：江別市セラミックアートセンター。

■古文書講座「古文書に親しむ(全3回)【実践編】」第3回を開催。担当：三浦泰之。

7月5日(金)

■第5回特別展「アイヌ語地名と北海道」開会式

7月6日(土)

■第5回特別展「アイヌ語地名と北海道」が開幕。(～9月23日(月・祝))

■講演会 連続講座「アイヌ語地名と北海道」「アイヌ語地名」とはなにか」を開催。担当：児島恭子氏。



7月7日(日)

■講演会 連続講座「アイヌ語地名と北海道」「今井八九郎一人と業績」を開催。担当：佐々木利和。

7月11日(木)

■全国歴史民俗系博物館協議会2019年度年次集会を開催。

7月12日(金)

■全国歴史民俗系博物館協議会2019年度エクスカーションを実施。於：北海道開拓の村。

7月13日(土)

■講演会 連続講座「アイヌ語地名と北海道」「菅江真澄がみた北海道・東北の地名」を開催。担当：石井正己氏。

7月14日(日)

■特別イベント「北海道ジオパークまつり2019」を開催。担当：道内ジオパーク関係者。

7月15日(月・祝)

■学芸員による特別展展示解説セミナー「地名にまつわる〈アイヌの伝承〉をみる」を開催。担当：遠藤志保。

■屋上スカイビューを特別開放。

7月17日(水)

■特別イベント「[特別フォーラム] ふるさとの〈地名〉をみつめて」を開催。担当：関根健司氏、郷右近好古氏。

7月19日(金)

■カルチャーナイトを開催。於：北海道庁旧本庁舎北海道博物館赤れんがサテライト。

7月20日(土)

■講演会 連続講座「アイヌ語地名と北海道」「蝦夷通詞とアイヌ語地名」を開催。担当：谷本晃久氏。

7月21日(日)

■ちゃれんがワークショップ「石器をつくる」を開催。担当：本吉春雄氏、右代啓視・鈴木琢也。

7月24日(水)

■館内定例研究報告会を開催。発表者：田中祐未・舟山直治。

7月27日(土)

■子どもワークショップ「地図を楽しもう！A」を開催。担当：鈴木明世・鈴木あすみ・遠藤志保、北海道地図株式会社スタッフ。

7月30日(火)

■サイエンスパークを開催。於：札幌市地下歩行空間。

8月1日(木)

■はっけんイベント「アイヌ民族のゴザ編み機でコースターをつくろう」を開催。(～8月18日の開館日毎日、8月24日～9月29日の土日祝)



8月3日(土)

■子どもワークショップ「地図を楽しもう！B」を開催。担当：鈴木明世・鈴木あすみ・遠藤志保、北海道地図株式会社スタッフ。

8月4日(日)

■講演会 連続講座「アイヌ語地名と北海道」「伊能忠敬と間宮林蔵の蝦夷地測量」を開催。担当：高木崇世氏。

8月10日(土)

■特別展関連イベント「北海道の地名 子どもクイズ大会」・「北海道地名クイズ王決定戦」を開催。進行：池田貴夫。

8月11日(日・祝)

■学芸員による特別展展示解説セミナー「江戸時代の古地図・古文書とアイヌ語地名」を開催。担当：東俊佑。

■屋上スカイビューを特別開放。

8月12日(月・振)

■学芸員による特別展展示解説セミナー「北海道の地名うんちく話～ふるさとに帰省された皆様に」を開催。担当：池田貴夫。

■屋上スカイビューを特別開放。

8月17日(土)

■総合展示室クローズアップ展示③～⑦を展示入替。

③アイヌ語地名研究者・山田秀三の葉書から～12月18日(水)まで開催。



④アイヌ地名研究者・山田秀三の、アイヌ文化の記録や保存への関わり～12月18日(水)まで開催。



⑤岩手県から北海道へ渡った神楽～12月18日(水)まで開催。



⑥たぐん(北海道拓殖銀行)～12月18日(水)まで開催。



⑦北海道の地名にちなむ植物～12月18日(水)まで開催。



■子どもワークショップ「草原の主・トノサマバッタをさがそう」を開催。担当：堀繁久・表深太・水島未記・鈴木あすみ、自然ふれあい交流館スタッフ。

8月18日(日)

■子どもワークショップ「ドライアイスであそぼう！」を開催。担当：表深太。

8月20日(火)

■博物館実習、～8月30日(金)まで10日間。実習生計17名(3大学院、10大学)。担当：社会貢献グループ。

8月21日(水)

■特別展入場者1万人達成セレモニー実施。

8月25日(日)

■講演会 連続講座「アイヌ語地名と北海道」「アイヌ語研究からみた「アイヌ語地名」その1」を開催。担当：佐藤知己氏。

8月28日(水)

■野幌森林公園ヒグマ対策連携会議を開催。担当：総括グループ。

来館者数

○2019年6月～8月

総合展示室 26,963人 特別展示室 17,272人 はっけん広場 5,325人

○累計(2015年4月～2019年8月)

総合展示室 478,270人 特別展示室 359,895人 はっけん広場 111,463人

森のちゃれんがニュース 第17号

発行日：2019年9月25日

編集・発行：北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2019